

# 2010年さくら道270kmウルトラ遠足

(2010年4月30日～5月2日)

ゼッケンNo. 149 山猫@滋賀

## ■はじめに

昨年の8月初め、UMMLにK野さんが来年4月にさくら道270kmウルトラマラソンが復活する模様との情報を海宝さんから得たという内容をアップされた。K野さんもさくら道常連だったので、復活を心待ちしていたひとりだろう。

そのすぐ後にマークンの母さんから個人メールが届き、海宝さんと三浦さんご夫婦が事務局をされ、要項もできあがっていて、4月30日スタートで先着200名が枠とのこと。momiさんからは「前にさくら道を走っておられた方々は高齢になられているので、参加されるかどうか？。200人集まるかどうか？」と心配されているとのこと。すでに三浦さんのHPにはスタート地点は「JR東海バス名古屋営業所」、ゴールは「金沢ゆめのゆ」とあった。このことを知った時、胸が騒ぎ、早く参加要項を送って欲しいと気持ちは高ぶるばかりだった。

8月30日に立山登山マラニックから帰って来ると参加要項が届いていた。とりあえずメッセージを添えて、申し込む。以前のような過熱した申込みにはならないだろう。10月に入るとさくら道掲示板には受付終了の書き込みが三浦さんからあり、「参加確定通知書」が届く。情報によるとリピーター半分、初参加半分とのことだった。10月半ばに参加費25000円を振り込んで、正式申し込みをする。

三浦さんに電話し、コースの確認をすると一部で変更があった。白鳥から高鷲までの間にある2ヶ所の左側旧道は国道に、富山・石川県境は新道に、ゴールは「金沢ゆめのゆ」に変わっていた。GWまではたっぷり日にちもあったので、40kmくらいをできるだけ歩かず毎月走り、大会に備えた。

そんな中、年が明けた1月半ばに腰痛に見舞われ、それが収まると腰周り半分に赤く大きなジンマシンのようなものが広くでき始めた。それでも走っていたが、気になって皮膚科に行く。「帯状疱疹」だと言われ、安静が必要とのこと。1週間の間、ウイルスの活動を抑さえる薬を飲み、活性化したウイルスが少しでも収まってくれることを願った。走ることはできないので、この間に東海道ウォーク36kmを試みた。

これが悪い方に出たのかわからないが、薬負けしたようで、今度は本当のジンマシンが身体全体に出て、辛抱できないくらい痒かった。最初の薬は効かず、薬を変えて貰ったら効いたが、これも収まるまで1週間掛かった。収まったと思ったら、今度は左下腹に強烈な神経痛が起こった。帯状疱疹の冊子を読んで、帯状疱疹が治り出してから、しばしば帯状疱疹後神経痛が起こると知っていたので、その日に皮膚科の先生から紹介して貰ったペインクリニックに行き、腰の「神経ブロック」を行って貰った。これは凄い治療法で翌日には痛みがかなり収まった。そして、この先生は神経ブロックでは日本でも権威のある先生だと知る。

それから1ヶ月経った3月初め、今度は手の指先の痺れが出始め、再びペインクリニックに行くと頸椎の神経が軟骨によって圧迫され、血行を悪くしているためと言われた。肩の凝りも首の痛みも皆んな同じ神経からきているとのことで、左右の喉元に「星状神経節ブロック療法」を行って貰った。左右同時にできないので交互になるが、これを何回かやって貰ってから、痺れは治まり、凝っていた肩や首が楽になると実感できるようになった。

3月後半に3連休があるのでさくら道対策、徹夜対策として、東京まで青春18切符で行くことに決めた。途中の熱海駅で荷物をロッカーに置いた後に東京まで行き、夕方から熱海を目指して国道1号線を走ると約100km、良い練習になるはずだ。そして、熱海温泉の湯に浸かり、身体の疲れを抜き、ビールを飲みながら、また青春18切符で帰る。素晴らしい我が提案と思っていたら、3連休のうちの2日間は中国出張で潰れることになり、ご破算となってしまった。これでさくら道への練習ができないまま、当日を迎えることになりそうだ。

4月からは職場が変わり、何かと忙しく練習も十分できない状況の中、また本番10日前に3泊4日の中国出張が入り、さくら道どころではなくなっていた。毎日が宴会漬けで楽しいひと時を送っていると楽しさ優先で走ることには二の次になっていた。しかし、5時間を切る睡眠不足の中、中国では3日間共に8kmほど夜明け前に走ることができたが、危険な町で我ながらひとりよく走ったものだと思う。2日目には道を間違え、方向がわからなくなり、大変なことになる寸前だったが、偶然にもそれがホテル付近で九死に一生を得た気分だった。

そして、4月は225kmほどしか走れていない中、29日名古屋出発の日を迎える。今年になってから、一連の病との闘い、そして、2回に渡る中国出張で本調子にはほど遠い中でこのさくら道になりそうだが、7年振りにさくら道を愛する仲間達との再会に心躍っていた。

## ■前日

15時にホテルに入りたかったので、12時半頃に家を出て、JRを乗り継ぎ名古屋へ向かう。車窓から見えるG

Wの風景は毎年同じで、新緑は目に優しく、今大会に向かっているという緊張感は微塵もない。9年前、初めてさくら道に参加した時は絶対に完走しなければならないという強い重圧が押し掛かり、凄い緊張感だったことを思い出した。GWだというのに電車はそれほど混んでなく、高速1000円化が最後かもわからないのでGWは車でという人が多いのだろう。

名古屋には15時前に到着し、先ず明日スタート地点に向かうために乗る「あおなみ線」の改札口の確認に行く。あおなみ線の改札は駅の一番西側のわかりにくいところにあった。そこから、宿泊する「ビジネスホテル・カム」までは5分くらいで行けた。去年の12月にネット予約したが、たまたまヒットし、3490円の安いホテルを押さえることができた。フロントにあるコーヒー自販機やソフトクリームは無料で、駄菓子も置いてあった。また、フロントのパソコンは初めて見た物でテーブル自体の真ん中にディスプレイがあり、キーボードはスライド式で全く場所を取らない昔のインベーターゲームみたいな感じだったが、反射してちょっと見難かった。部屋は狭かったが、薄型テレビで値段からしたら格安に思えた。



るとH井さんとみやけんさんの姿があった。7年振りの再会で懐かしい。

2時間ほどテレビを見ながらゴロゴロした後、H井さんがUMMLにJRハイウェイバス乗り場に18時集合の案内をされていたので出向く。行って見



すでに宴会が始まっているとのことで名古屋駅前の居酒屋「鶴八」に行くと懐かしい顔、顔があった。K来さん、T葉K三さん、T屋さん、弟の兄さん、Oさん、お馴染みのK田さん、フランケンさん、枸杞さんなどでさくら道には再会という二文字が似合う。生ビール2杯と軽く食事して、2時間くらいして店を出る。ホテルへの戻り道で「すき家」に寄り、牛ネギ丼を食べて明日からの英気にする。



ホテルに戻ってからは足のマメがしやすい箇所テープを巻き、明日からの予防をする。そして、テレビを見ながら、缶ビールにつまみでくつろいでいるうちに22時が過ぎ、そのうちに眠ったようだ。

## ■当日朝

4時45分に起きて、「すき家」へカレーを食べに行く。弁当を買う手もあったが、温める電子レンジがホテル内になかったの、ホテル近くで食べることにした。半袖シャツ、ランパンに着替えて、5時45分フロントに集合。おっさんの会メンバー、お塩師匠、そのこさん達とタクシー3台に別れてスタート会場に向かう。偶然にも凜峰さんが通られたので便乗された。タクシーの運転手はJR東海バス名古屋支店が判らないようで、ナビ便利だった。その道中で走って会場に向かわれる映えのある女性の姿があった。それはさくら道の女王・K村さんだった。さすがだ。

6時にスタート地点、JR東海バス名古屋支店に到着。ここは佐藤良二さんが初めて桜の樹を植えられたところだが、現在の1号佐藤桜は当時のものではない。徐々にランナー達が集まり始めていた。受付にはタラさん、くーさん、K林さん、マークンの母さんの姿もあった。呼び掛け人の海宝さんとは甲州夢街道以来5年振り、三浦さん





とはそれぞれのさくら道以来4年振りの再会。三浦さんは1年前、杖を付かっていたと聞かされたが、今は杖もなく歩かれていますので良くなりました。本当に良かったと思う。そのうちに7年振り、あるいは数年振りという参加者との再会を喜び合う。さくら道でなければ逢えない方々と再会できて、本当に良かったと感じる。7年振り

に大会が復活できたことの意義は大きい。

まず海宝さんが挨拶をされた。冒頭、「勘違いしてスタート地点に立っているランナーが数多くいる。7年前の自分の力と今は違うということも知らずに・・・」と笑いながら話された。「沿道の方々との出会いを楽しみ、参加者それぞれのさくら道を楽しんで欲しい。沿道で私設エイドして下さる方々もあろうかと思うが、感謝の気持ちを忘れないように」、こんな話をされた。続いて、三浦さんから説明があった。そして、JR東海バス名古屋支店長？からの挨拶もあった。

全員で集合写真を撮った後、スタートする。スタート場所は過去より敷地内奥だったため、少し長くなっていた。



## ■さくら道270kmウルトラ遠足スタート

JR東海バス・名古屋支店

4月30日

7時00分

JR東海バス古屋支店長？のピストルの音で朝7時に一齐スタート。走り出して、JR東海バス名古屋支店を出たところの右に桜の樹と「太平洋と日本海を桜でつなごう」と佐藤良二さんが詠まれた詩の碑があったので、いき



なり慌てての写真撮影となった。その後は狭い歩道を進みながら、JR高架下を左折すると名古屋駅前通りで、ここからは歩道も広くなり、名古屋駅前に進む。知人は弟の兄さんくらいで、周りには知らない人が多かった。名古屋の中心地、目の前の青空に高層ビルがそびえ立っていた。



「名古屋駅前」で右折して、桜通りを進む。70歳のベテラン・Y崎さんの後ろを付くように進む。Y崎さんは10年連続完走された数少ないさくら道ランナーのひとりだ。GW中とはいえ30日は平日。スーツ姿のビジネスマンや自転車の高校生とすれ違う。途中、「日銀前」では歩道橋を渡った。

「桜通大津」で左折するが、ここでいつも通り、K田さんの応援があった。

名古屋市内は道路幅も広く、信号が多いので信号待ち時間も長い。

最初はこの方がのんびりできて有難い。Y崎さんに「ゼッケンナンバーがどうして3桁何ですか？。本来なら1桁のはずですよ？」と話し掛けると「まだ申し込まれてないけど、早く申し込んで下さいよ」と事務局から催促の連絡を受けたので、それから申し込んだとのことだった。名古屋城をもじったよ



うな「愛知県庁」「名古屋市役所」を右手に見て、「名城公園」に差し掛かるとやっとの思いでトイレにありつけた。トイレに群がるランナーは多い。辛抱していたのだろう。名城公園の歩道の頭上には綺麗な藤の日除けがあった。「城北橋」で左折し、名古屋城のお堀を周回する形になる。この辺りで名古屋城がはっきりと見えた。幅下橋手前で、三浦さん、タラさん、くーさんの応援を受ける。

「幅下橋」(10.2km)で右折すると国道22号線を北上することになる。この付近からU田さんと前後するが、真っ黒に日焼けし、とても元気な走りだった。真っ赤な上下のY崎さんは軽快な走り。「枇杷島」付近で弟の兄さんの水害はどうだったのだろうという声が聞こえた。この辺りで水害があったのは数年前のことだったと思われる。道路の車は多くもなく、少なくともなくというところだ。

例年だとこの辺りから暑くなるはずなのに、今年は冷たい向かい風で空気も澄んでいて、汗も少ないので走りやすく助かる。「清洲中学校前／東名阪高架下」手前の歩道橋上り下りでO浦さんに追いつく。ピンクのロング



タイツに色とりどりの派手なシューズが目についた。そこからは変化のない歩道を真っ直ぐに北へ進む。

### 一宮裁判所前(26. 3km)

4月30日

10時03分

三浦さんやK田さん、マークンの母さんなどの姿があった。水とクッキーを頂き、マークンの母さんに写真を撮って貰った。JR、名鉄の「今伊勢跨線橋」を越えると徐々にランナー達は右側歩道に進路を変えるが、私はずっと左側を走り続けた。その先には「2006年それぞれのさくら道」の時に寄った「すき家」があるからだ。11時前にすき家が見えたので入ってミニカレーを注文する。喉が渴いたので冷えたお茶を何杯も飲む。朝も昼もすき



家のカレーだ。食べ終わると冷茶を空ペットボトル一杯に注ぐ。その時にマリオパパともうひとりの男性が入って来られたので挨拶。マリオパパとは資料を送らせて貰ったりして、メールでは交流していた間柄だ。マリオパパは大盛カレーを注文、「おっ・・・」って感じた。



店を出るとタイミングを見計らって右側歩道に移り、歩道のない緩い坂を上ると「木曾川橋」が見えた。名前の通り、木曾川を渡る。ここの歩道はクッションを敷いたように感じる場所だ。渡り切ったところにはエイドがあり、「走れ遠足？、いざかなたへ」と書かれた横断幕風の布が下がっていた。ここでは水を頂く。



笠松ペットセンターのある「栄町西」(35. 9km)で右折。ここは以前、「柳津東塚」という信号だったので変わったようだ。2001年に初めて参加した時から入っていたセルフうどんの店が見えた。その頃、先を走られていたU田さんが横に来る。セルフの店に誰も入らないので、コンビニで缶ビールとつまみで食事したとのこと。少し行ったところで信号待ちしていると「やまねこさん～」という声が聞こえた。後ろにバイク姿のトライアスリートがいたが、誰だか全くわからなかった。サングラスを外されるとN川さんとわかった。N川さんとは10年振りくらいの再会だ。彼は2000年夏の「トランス蝦夷・to宗谷」に参加されていたが、あの織り姫さんの悲劇に大変なショックを受けられたと風の便りでは聞いていた。久し振りに元気な姿を見られて良かった。このさくら道に参加したかったそうだが、気付いた時には締切が終わっていたようだ。コース上をウロウロしているそうなので、また会えるかもしれない。



その先で名鉄の踏切が2箇所あり、1回は遮断機が下りてくれた。強制的に止まらされると思い切り休める気がする。その頃、さり～♪さんに追いつくと「元気ですね！」と言われる。すぐ先で神奈川のN村さんも一緒になった。一昨年の夜走りの時、遠く関西まで来られていたのを思い出し、声を掛けさせて貰う。

「金津町4」(41. 6km)を右折、へばってはいるものの何とか走れていた。周りが頑張られているので、ひとり脱落する訳にもいかない気持ちもあった。やがて歩道がなくなる。休みたい言い訳として、左に新緑が鮮やかな「洞山」が見えるので写真を撮る。道路反対側をN原さんが2本のペットボトルを両手に持って走られていた。いつも目に留まる「白山神社」の鳥居が見え、ここからは歩道がある。平坦な歩道をペースが乱れないように走る。道



路反対側には廃線となった名鉄の駅跡だけが残されていた。6年前の「ひとりさくら道」の時は電車で美濃まで行ったので懐かしく思える。右に見える「三峰山」の緑も鮮やかだ。

「日野南」を越えると緩い坂が続く。岩田坂だ。ここは歩くことにした。例



年だとこの辺りはバテバテになるところなのに、肌寒い天候の影響で苦しくはなっているものの、バテバテではない。坂の途中に私設エイドがあり、バナナとドリンクを頂く。有難いことだ。坂を上り切ったところでは「長良川走ろう会」と書かれた方の声援を受ける。この辺りも例年より車は少ないよう



に思う。50kmを超えた頃、慢性となった左股関節の筋痛が始め、どこまで持つか気になり出す。ちょうど右側にサークルKがあったので、カロリー補給にアイスモナカを買って食べながら歩く。そのサークルK前で医師の表示をされた方が「10km先にエイドがあります」と教えて下さった。「棚橋工業」手前でSサトさんに抜かれる。名前の漢字が女性だが、私と同じだ。軽快な走りが羨ましいが、何故苗字がカタカナなのか不思議に思う？

関市に入って、下りが終わったところで歩き出す。水分は摂っているつもりだが、風があるので思ったより脱水気味かもしれない。右に「平成コブシ街道」があったが、前よりみずぼらしく思えた。ここから左折地点までは直線になるが、この右側歩道は進みにくい。ここで男性が立っておられ、「30番目」と順位を教えて貰えた。ちょっと早過ぎる感じだ。左側の旧名鉄線の向こうに4mくらいの脇道があるので、その始まりのところで左側に入る。ここはストレスがないので気持ち良く走れた。



昔みたいに東海北陸道高架下で関さくらエイドがあれば有難いと思っていると、菰野RCのエイドが見えた。ネイチャーランでは激走されながら、兼六園2km手前でリタイヤされたN村さんやネイチャー男女トップのM下夫婦など超豪華メンバーの顔が揃っていた。N村さんには菰野の反対側の鈴鹿スカイラインを時々走っていることを話し、そばとコーラなどを頂く。その横には先ほどエイドを教えて貰った医師の方がいて、「後藤です」と言われた。2008年11月に積雪のさくら道を走った時に、いろいろとメールでやり取りした一宮の整形外科医・G藤先生だった。今回も申し込まれていたが、故障で参加できなかったそうだ。「厳寒さくら道読みましたよ。凄い状況だったんですね」と言って下さった。

その先の「栄町4」(58.0km)で左折するが、信号の表示板が小さくて判りにくかった。この交差点の前でSサトさんが通り越されたみたいに思えたので気になったが、問題なかったようだ。美濃市役所までは7km弱あるので、いつもここは辛い区間になる。走っては歩きを繰り返すが、喉の渇きがひどくなり、自販機を探す。徐々に歩きが多くなり、抜かされることも多くなった。とりあえず美濃市役所を越えるとひと区切り付くので、ここまでは楽に辿り着きたかった。

**美濃市役所(64.7km)**

**4月30日**

**15時09分**

美濃市役所前は今までで一番早い時間に通過できた。思い掛けないことに我ながらビックリする。気温が上がらなかったことが幸いしたのだ。この頃、股関節の筋痛は収まり、これなら金沢まで行けるかもしれないという自信に変わっていた。参加できなかった方々、この場に居たくても居ることができなかった方々の思いを背負って、

金沢を目指すことが、さくら道に参加させて貰っている意義だと思えるようになっていた。美濃市役所のすぐ先には「長近の松」という立派な松の木が1本、国道156線沿いにある。

「泉町」の交差点右側には「うだつの上がる町並み」という大きな表示もある。ここで左に折れると下り坂になる。この辺りは車が混雑していた。下ったところには道の駅「美濃にわか茶屋」があるが、その道路脇にはまた私設エイドがあった。冷たいタオルを差し出して頂き、イチゴを頂く。美味しい。ここからは長良川沿いのコースとなる。みちくさ館までの間に冷水が出ていたところがあったが、前回も見つからず、今回も捜したが、やはり見つからなかった。なくなってコインランドリーに変わったようだ。ただ、その横に水道があったので、そこで顔を洗い、身体を冷やした。この辺りはもっと車が多いはずなのに、今年はかなり車の数は少ないようだ。

道端の民家には何匹もの鯉のぼりが吊り下げられていた。さくら道一帯は男の子の節句の屋外飾りが派手なように思う。いつも気温チェックする路面温度表示板は18℃を表示、例年より7～8℃は低い。「みちくさ館」前エイドではアップルジュースを頂く。確か、2006年のそれぞれのさくら道の時はたった十数人だったのにエイドして



下さっていたように思う。横には風情のある風車小屋があった。その先で道路を横断し、左側歩道に移る。この辺りからK嵐さんと前後する。肘を立て、シューズが音を立てるような摺り足走法が印象深かった。

この辺りから東海北陸道が数え切れないほど何回も目の前に現れるようになる。歩いていると手に飲

食物の入った袋を下げたK野さんに抜かれる。こういう手もあるなあ〜と思う。「立花トンネル」を越えると長良川川幅いっぱい鯉のぼりがなびいていた。須原の鯉のぼりだ。これを見ると一息付きたくなる。「須原トンネル」入口では気温が15℃まで下がっていた。この辺りはほとんど歩きになっていた。前に道の駅の表



看板が見えると元気が出始める。

道の駅「美並」(74.8km)には16時39分に到着。O橋さんのお弟子さんのエイドでスポーツドリンクを頂くと「先でマッサージしていますから」と教えて貰う。先とはすぐ先の空き地だと思っていたら、そうではなかった。店に入って、そばと缶ビールで腹ごしらえ。血液が足に下がっているのが自覚できたので、足を伸ばして食べた。かなり肌寒くなって来たので、缶ビールは冷えるかもしれないが栄養補給にと飲む。フランケンさんも到着。



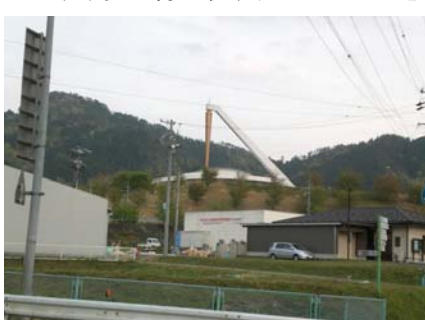
道の駅を出ると足も軽くなり、走り出せた。足を伸ばした効果が表れたのだ。F水さんに追い抜く。F水さんといえば、40時間を切ってゴールされていた実力者だが、足の動きから7年の歳月を感じる。前に進みながらマッサージ台を捜すが見当たらない。2003年まではこの辺りにあったのと思うが、今回はここではないようだ。一旦緩く上った後、長い下りでは快調に走れた。下り切ったところに「吉田小学校」がある。今年の花壇は地味な色だったが、横には立派なクスノキがあり、しばし眺める。これは美並の天然記念物だ。



「下田橋」を渡るとゆったりと流れる長良川を眺められる。川の流れを見ると心が落ち着くように思える。すぐ先からは長良川とさくら道の狭い間を長良川鉄道が走る。私にとって、この3本の線が並ぶ風情は何ともいえない味わいがあるのだ。気がつかないうちにひと休みしようと腰を下ろすと、そこは「郡上市美並庁舎」だった。旧美並町役場だ。時計を見ると過去で一番早く、2003年よりも約45分早く到着し、完走への自信は揺るぎないものになっていた。しかし、寒さの方は増す一方で、手はかなり冷たくなってきた。



「美並インター口」の右には「日本まん真ん中センター」が高台に見えた。美並は緯度、経度で日本の真ん中にあたることから、このような名前が付いている。そこからは長い下りがあり、居眠り防止用フクロウが頭上に見えた。長良川は蛇のように蛇行しているので、目の前が開けると必ず、少し青い長良川のせせらぎ





が暖かく迎えてくれる。少し先には深戸駅手前の桜並木が見えて来た。良二さんが植えられた桜並木だ。カーブの広がったところでは加納くん一家がエイドを出して下さっていた。加納くん似の男の子は2歳半で可愛い盛りだ。パンとスポーツドリンクを頂く。加納くんとは一昨年の夜走り以来だと思う。



美並の桜並木を見ながら進んでいるうちに「深戸駅」を見逃してしまった。歩道がなくなり、時計も18時半を回った頃、寒さで辛抱できなくなったので、高架下の道路脇でウェアの重ね着をする。上は長袖シャツを半袖の下に着込み、下はロングタイツを履いた。LEDライトも出す。これからは暗闇になるので、気をつけ



ないといけない。「名津佐トンネル」は12℃を表示していたが、体感温度は10℃以下だ。歩が多いが、それでも走りを入れて、ただひたすら郡上八幡を目指す。歩道のないところ、あるところ様々だ。

「ドライブイン千虎」、ホテル「郡上八幡」が見え、ここには天然温泉「宝泉」がある。この先の釣具屋の店先には水舟があったが、今回はただの水道に変わっていた。ここでペットボトルに水を注ぐ。後ろにいたランナーも同じようにペットボトルに水を注いだ。少し進むと桜のライトアップした和食の店が右にあるが、その先で旧道に進む。前のランナーが国道を進もうとしたので、声を出してコース間違いだと知らせる。彼は「山猫さん、歩くの速いですね。文集を読むと2003年はほとんど歩いてゴールされたそうですね」と言われ、「それはN藤さんではありませんか？」と応える。初参加か、リピーターかはわからないが、文集を読まれたようだ。



## 郡上八幡駅(93.7km)

4月30日

19時45分



郡上おどりの提灯がぶら下がっている「郡上八幡駅」に立ち寄ると、思っていたより時間は過ぎていなかった。時計を見て、まだまだ大丈夫、完走を確信していた。駅舎に入ると数人のランナーが休んでいた。すぐに出て行こうとするとサメさんが到着。「サメさんですね？」というと「はい」と返事が返ってきた。この先にエイドがあるかどうかわからないが、エイドはなくても「八幡インター口」にはサークルKがある。このエイドは郡上八幡の喫茶店のママさんたちが出して下さったエイドは豪華だったことを思い出す。右の高台を見ると白くライトアップされた「八幡城」が鮮やかに輝いていた。何れにしても、ここで夕食を摂らないと。とんこつラーメンを買って、店の外

で食べていると寒さはピークに。H井さんも店内に入って来られたが、いつの間にか姿がなくなっていた。冷たい風が座っているだけで肌を刺す。震えながらの食事で、ゆっくり食べてもらえない。少し休んだので走り出す。ここから白鳥までは長い。走っていると歩いているH井さんを抜かす。「寒いので歩きながら食事するようにした」と言われた。座り込むよりはロスも少ないし、それもウルトラの駆け引きだろう。この先、大和までは暗闇の中、歩道のないところが続くので十分に気を付けないといけない。東海北陸道高架下を越える辺りから、歩きが変わった。抜かしたH井さんにも抜かされ、どんどん背中が小さくなっていった。こんなに暗いのにライトを点けていないランナーもいた。持っていないのか、持っていて出していないのか、何れにしても危険過ぎる。

ほとんど歩きた。大和に入ると路面が濡れていて、凹凸が見辛く、足元が気になり始める。後続ランナーにどんどん追い着かれ、完走への確信が揺らいできた頃、車道側から斜めに歩道に入ろうとした時、斜めになった歩道との分離帯の端に左足を引っ掛けて転倒。CW-Xの左膝は破れ、血が滲んでいた。気持ちの上で動揺した。それは諦めにも繋がるので、自分自身の気持ちが折れないようにと願った。この時点では痛みはあまり感じなかつ

たので、必死で歩いて白鳥を目指すしかない。

「JAめぐみの大和南」(103. 0km)は21時45分に通過。真っ暗闇だ。7年前は明るいライトが待ち受ける中、H田よのさんのエイドがあったことを思い出しながら、ただひたすら歩く。時折、走るがすぐに歩きになる。寒さでエネルギーを喪失したような状態、力が湧かない。フランケンさんに追いつかれ、「奥長良の清水」で一緒にペットボトルに湧き水を注ぐ。昨年走った学習効果だ。

歩いてばかりなので、後続ランナーにどんどん抜かれ、落胆の気持ちが大きくなる。歩道のない道路で足元に気を付けながら進むとサークルKがあったので、クリームドーナツと飲むいちごヨーグルトを買う。22時32分だった。道路脇にひとり男性が立っていて、ランナーに声を掛ける訳でもなく、変な男やなあ〜と思う。ヨーグルトはその場で飲んで、ドーナツは食べながら歩いた。頭上に東海北陸道の高架が見えた。やっと辿り着けたという感じだ。ここから白鳥インター口まではそんなに遠くないと思っていたが、実はそうではなかった。昼走っているのと夜では全然違う。「日本土鈴館」を越えてもなかなか白鳥市街手前の高架は見えて来ない。

この辺りの歩道はつまずきそうだったので、車道側を進む。転倒以来、足元に神経が行くようになっていた。この辺りでさり〜♪さんが前を歩かっていたので抜かした。実際にさり〜♪さんだったかどうかは怪しいが……。走るところか、歩くことさえまならぬ白鳥への道だった。ようやくオレンジ色の明るい「白鳥インター口」が見え、温度表示計も見えた。「やっと来られた」、そんな心境だ。気温は4℃、しかし体感温度はマイナスだ。とても4℃とは思えない寒さ。

長良川鉄道を越え、少し下るとライトアップされた桜がある。左側のボタン桜は咲いているように見えたが、右側は散った後だ。しかし、いつも思うのはライトアップされた桜は散った後でも咲いているように目には留まる。以前のコースは左折して「奥美濃大橋」を渡り、公園内のややこしいコースから顕彰碑に上るが、今回はコースが変わり、左折ではなく真っ直ぐ直進し、白鳥市街地を通過して向小駄良から顕彰碑に上るコースなので、距離は少し長くなっていった。市街地を歩いていると居酒屋から出てきた兄ちゃんに「頑張れ！」と声を掛けられ、会釈する。右に行けば白鳥駅行けるT字路を左折し、「白鳥大橋」を渡って、一旦「向小駄良」交差点に出る。

ここからは真っ直ぐに進み、初めての逆顕彰碑コース。折り返して来るランナーの姿が見えた。先ず、例によって「向小駄良防災センター」の向かいの公園に6年前、さくら道を愛する仲間達と一緒に植えた2本の庄川桜の実生の育ち具合を暗闇の中で見ようと近寄るが、実生が見当たらない。枯れてしまったのだろうか？、雪の重みで折れてしまったのだろうか？、1年前はあったのに。悲しい思いで坂を上って行く。佐藤良二さんの民宿「てんご」前を通り、その先は結構急な坂を上って行かなければならなく、疲れた身体には応える。

顕彰碑に一番近い民家に近づくといつも通り、外灯が点灯した。今夜は外灯も忙しいことだろう。やっとの思いで「桜守佐藤良二君顕彰碑」(114. 9km)には23時41分に到着。今夜はライトアップされていた。顕彰碑と左の灯籠をじっくり眺めて、降りて行く。手前にあるアズマヒガン桜の古木「藤路の桜」も立派な桜だ。下り坂は結構急なので、転倒した膝が下りの衝撃で痛む。ますます先々が怪しくなってきたことを実感。戻りで再び、庄川桜の実生を確認するが、やはり公園の道路側にはなかった。金沢ゆめのゆでたんだいさんとこの話をすると、たんだいさんはしっかり育っていたと言われた。私の勘違いだったのだろう。これで安心した。



### 白鳥・民宿さとう前(116. 1km)

4月30日

23時53分

顕彰碑に向かう時、大きなエイドを横目で上って行っただけで、今度は正真正銘、寄ることができた。思い出すのは9年前、初めてのさくら道はこの場所に私設エイドが設営されていた。ここで頂いたおでんのご飯は最高に美味しかった。その次の年から、エイドは向小駄良防災センターに変わっただけに懐かしく思う。1年半前の厳寒さくら道でも、ここの食堂のご飯はとても美味しかった。6年前のさくら道交流会では酒をいっぱい飲んで、2階で泊まらせて貰った。私にとって「民宿さとう」はいろいろな思い出がある場所だった。

受付にはペラペラS井さんが、切り盛りされている女性軍の中にうずらさんの姿も、「どうしてこんなところで？」と思わず言ってしまった。momiさん、くーさん、タラさん、マークンの母さんなど、みんな忙しそう。外の寒いエイドには10人くらいのランナーがいた。猪肉汁を頂いていると、毛糸の帽子を被った男性から、「お久しぶり」と声を

掛けられたが、何方か全く思い出せない。首を傾けて考えるがわからない。「羽倉です」「思い出しました」懐かしい栃木のH倉さんとの再会だった。H倉さんと初めて会ったのは97年富士五湖でなかったか？。再会とは本当に良いものだ。この時に左膝の手当をG藤先生に行って頂く。消毒と大きな傷テープを貼って貰い、



何かか予備の傷テープを頂いたが、これが重宝した。おにぎりを頂き、中でマッサージが行われていると知り、民宿の中に入れて貰うとアルコール漬けのK田さんの姿があった。元気な人だ。

横の部屋でマッサージをして貰うにもマッサージ台がいっぱいだったので待つ。マッサージをやってくれたのは過去3回でもやって貰ったことのある青年だった。ここでも再会があった。彼は7年前と変わっていなかった。整体をやって貰うと左右のバランスが悪いと言われ、丁寧にほぐして貰えた。終えて、外に出ると無茶苦茶寒かった。K林さんにおでんをお願いするが、皿を右手で持つとブルブル震えが止まらず、皿がひっくり返りそうになり、左手で右腕を支えた。自分でもびっくりするほどだった。おでんを頂きながら、ホットコーヒーを2杯頂く。ここでもネイチャー優勝のM下夫婦は手伝われていた。

30分ほど休憩し、先を急ぐ。郡上八幡からはかなり遅れていると思っていたが、それでも2003年と大差はなかった。人間の感覚と実際とは大きな差があるのが不思議だ。この日の白鳥は日中でも3℃くらいしか気温の上がない真冬日だったそうだ。これからはひとつ目のポイントである蛭ヶ野の上り下り、特に下れるかが心配だ。そんなことを思いながら、高鷲を目指す。

三浦さんから「右側を走って下さい」と言われ、この時点では元気に走り出す。前後に人は誰もいない。私は右を走るの嫌いで、特に夜は後ろから接近する車からよくわかるように左を走るようにしている。白鳥からはわずかにわかる程度だが、ずっと上り続けている。この辺りは軒先から山水が出ているので給水には不自由しない。途中でペットボトルに補給する。寒いからといって給水しないのは非常に危険で、それは冬の厳寒さくら道で体験したことだ。この辺り、非常に寒かった。その寒さで走れなくなるほどだ。

そのうちに腹が冷えて、トイレに行きたくなったが、道の駅・白鳥まで辛抱するしかない。「白山長滝神社」が左に見えれば、そのすぐ右先のカーブに「道の駅・白鳥」はある。道の駅に入ると奥まったところのベンチでは2人が寝ていた。トイレに駆け込み、空いているベンチで寝ようとする、ひとりが起き出した。フランケンさんだ。「寒い」と思わずお互いに言葉が出る。寝る前に痛み止めのイブAを飲んだ途端に吐き出した。白鳥で食べたものが全て出てしまった感じだ。とりあえず、冷たい風を受けながらもベンチで横になり、目を瞑る。5、6分くらい横になっただろうか。じっとしているとエネルギー消費が激しく、寒さ凌ぎにその先にある北濃駅で休もうと考える。

外に出るとそこそこの雨が降っていた。寒さに雨がプラスされれば、えらいことになると思いきや、直ぐさま北濃駅を目指す。北濃駅までは800mだ。雨は本降りになっていた。「長良川鉄道終点・北濃駅」に着くと寒さを凌ぐために前扉を閉め、ホーム側の扉も閉めようとするが、固くて閉まらなかった。ベンチで足を伸ばして休んでいると、誰かが入って来て、水を探しているようだった。この駅に水はないだろう。外を見て小降りになったと思えたので外に出て行くが、全然小降りではなく、正真正銘の本降りだった。

路面は水浸しでシューズが濡れないようにそればかりが気になった。以前のさくら道では旧道が正規のコースだったが、今回は旧道に迂回しなくても良いので、そのまま右にカーブし、橋を渡る。ここで2人のランナーが前にいて、走るペースが極めて遅いので、私の歩きの方が早く、あっさり歩いて抜かしてしまっただ。こんな時、申し訳ない気持ちになる。それにしても黒く濡れた路面は見辛い。その内、雲が切れ始めて、雨は止んだ。白鳥から平瀬までは明るい時、暗い時含めて9回目なので、ひとつひとつのカーブやどこで上り、どこで下るかまで頭に入っていて、映像のように情景が浮かんでくる中、高鷲を目指す。

「高鷲町商工会館」前(126.3km)を通過すると右折、国道156号線から一旦右に外れ、高鷲の市街地を迂回するコースに入る。2時47分だ。暖かい缶コーヒーを買い、手に持ちながら進む。前にひとりランナーがいたが、横を抜かして行く。コンソメスープを飲みたくなったので、目の前にあるサークルKに入ってみるがそれらしきものはなかった。売ってないのはわかっているのに、もしかしての期待だったように思う。

「穴洞橋」で国道156号線に再び合流。ここからはきつい上りが待っている。かつて、岐阜のO川さんが洞門を越えた先にある空き地でエイドを出して下さり、暖かいスープを頂いたのを思い出し、もしかしての期待が膨らむ。それは現実ではなく、空想だった。本来なら、空を見上げると無数の星がいっぱい見られるのだが、残念ながら、この天気では見る事ができない。また雨が降り出した。雨が降ると寒いのはと思っていたが、逆に風が止み、寒さはいくらかマシになっていた。頭上を見上げながら、大きく巡回するカーブを上って行く歩道のある道路へ。少し行くとスキー場がある西洞集落手前で民宿が点在する。

そこから道路幅が狭くなったカーブを下ると「ダイナランドスキー場」だ。K田さんから、「近道したければ、ダイナランドスキー場の反対側に橋を作っているの、そこを渡ってみるのもひとつの手。しかし、工事中で落ちる可能性大なので“さいなら〜”にならないように」と聞いた橋だ。そこを通り過ぎるとまた道路は広がって急な上りになる。その先のヘアピンカーブはかなりきつい。この時間帯になると蛭ヶ野からの対向車は少なく、白鳥から上って来る車ばかりで、大型トラックが多いので気を遣う。「牧歌の里」の明るい看板が目にとまった。この頃には雨も上がり、雲も切れ始めた。

オレンジ色の明るい外灯が先に見え、「道の駅・大日岳」だ。左側の駐車場には1台の名古屋ナンバーのワゴン車が止まっており、ランナーに何かを差し出していたが、私が近寄ると一気に後ドアを閉めた。明らかに個人サポートだ。正直いって、やって貰う方も貰う方なら、する方もする方である。そこまでして貰わないと走れないのか、先に進めないのか。情けないランナーの哀れみを感じた。

大日岳を越えると下り坂に変わるので、ペースは遅いが一気に走り出すと後ろに数人ランナーがいた。左の「駒ヶ滝」は雨が降ったためか、勢いよく水しぶきを立てて落ちていた。こんな駒ヶ滝を見たのは初めてだ。やや空は明みを帯び出していた。洞門を越えると標高840mの表示がある。ここからは急な上りがあり、上り切ると緩やかな上りになる。間もなく、分水嶺公園だ。

### 蛭ヶ野分水嶺(136.5km)

5月1日

4時37分

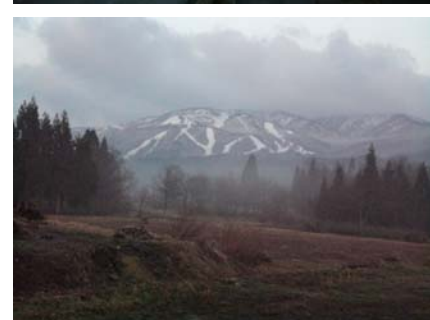
やっと「蛭ヶ野峠」に辿り着いた。蛭ヶ野に着けばまず、「分水嶺公園」、「太平洋・日本海」の石碑を確認することが大事だ。この場所から日本海に向けては庄川が、太平洋に向けては長良川が流れ始める。庄川沿いには船で渡らないと辿り着けない秘湯で有名な「大牧温泉」もある。その先のトイレのところで三滝MCのメンバーがエイドを開いて下さっていた。K宮さんの姿もある。お粥とイチゴ、水を頂く。7年前まではN瀬さん達の無名会の方々が元祖てぬきうどんをされていた場所でもある。蛭ヶ野は中間点なので、この先に進む上で大きなポイント地点でもある。



エイドを後にすると旅がらすさんが前に見えたので4年前のそれぞれのさくら道の時の話を少しする。トランスヨーロッパや単独日本列島縦断など経験豊富な旅がらすさんの走る姿はシューズが音を立てるほどの摺り足で、シューズの減りも早いだらうと感じた。しかし、スタミナは保障付きだ。蛭ヶ野高原から見て、左側の山はスキー場のようで、きれいにゲレンデには雪が積もっていた。方向からして「高鷲スノーパーク」かもわからない。夜明けの蛭ヶ野高原は山々に薄いガスが掛かって独特の雰囲気があり、疲れた身体には心を癒してくれるようだ。



後ろからY樫さんが追いついて来られた。ネイチャーとのダブルさくら道で還暦を超えられても、この元気さ。少し傾いた独特のフォームではあるが、粘りを感じさせる走り方だ。12年前、平城宮跡ダブルフルに初めて参加した時、雨が強くなったので止めて、近くのかんぼの宿の風呂に入ると脱衣に“Y樫”と刺繍されたジャージーが見えた。当然、会ったこともなかったが、「ジャーニーランのすすめ」に載ってあったり、「飛驒ウル16



0km」のビデオで見て、O山さんを追って走られている姿が印象深く、ジャージーにあった名前に感動したものであった。憧れだった人生の先輩の姿を目のあたりにする毎に、自分はまだまだ若輩だと感じる。



郡上市から、高山市に市境の気温は $-1^{\circ}\text{C}$ 、この気温は例年並みだと思いが、例年と違うのは冷えた身体にはより寒く感じる気温だ。その頃から、異常なほどの眠気を感じ、歩きながらコックリしたり、フラフラしたりが繰り返された。ややガスの中にいるような感じの御手洗、野々俣、滝ヶ野の集落を過ぎても眠気は収まらない。左側を進んでいて、眠気で足がもつれて下を流れる庄川に落ちるのではないかと。一晩目でこんな状態だったら、二晩目はどんな状態になるのだ。怖過ぎる。命の保障さえないと思う。半分居眠りしながら、「現実を直視しよう。もうさくら道はひとりで走ることも含めて、今回で最後にしよう。さくら道のゴールは何回もさせて貰った。もう十分



だ。これ以上、頑張ると身体が危ない。今の状態はその信号だ。恋いこがれ、人生観を変えてくれたさくら道は自分の心の中で、身体の中で永遠だ」と自分に言い聞かせ、もう自分の足で走り、歩くことはないだろう、それしか思うことができなかつた。

長い下りは左膝の擦り傷がズキズキ痛み、膝の内側まで痛み始めた。この時、白川郷で終えることを決める。後ろから来るランナーにどんどん抜かれるうちに「飛騨INFO庄川」が見えると7kmの下りは終わりだ。「飛騨INFO庄川」に立ち寄り、ベンチに座って目を瞑るが仮眠にまでにはいかなかった。もう走れないので、歩いているうちにJRバス牧戸駅先の「牧戸」T字路(145.5km)があり、6時25分にここを左折する。



左の広い歩道を進んでいるとO川さんに抜かれ、「走っているのと変わらないほど歩くのが速いですね」と言われた。それほどでもないと思っていたのに、そう言って貰うと自信になる。そう言われてから、また走れるようになっていた。O川さんは初めての2001年さくら道では足首痛で歩くのも辛くなった上平「ささら館」で食事中、初めて飲む鎮痛剤が効くか心配だったが、「30~40分すれば効き始めるから」と教えて下さった人。実際その通りになり、そのアドバイスのお陰で初めてのさくら道完走ができ、本当に有難かったと今でも思っている。



左を見ると牧戸独特のおとぎの国にいるような安らぎを感じさせてくれる風景が続く。この風景も好きだ。山のガスが切れ始めると青空も覗き始めていた。徐々に白川郷方面に進む車の数が増え始めた。「シュラ紀の化石群地」の石碑が右に見える。歩道がなくなると路肩は狭いが、左の方が普通は走りやすいの

に右側を進む男性ランナーがいた。どうしてかな？とっていると、右に身体が傾いているためにのように思えた。御母衣ダム湖が近づき、最初の橋である「岩瀬橋」を渡る。車が通ると立ち止まって端に寄る。橋の真ん中で左右を見渡した時、この先に続く御母衣ダム湖の朝の姿を見る度にさくら道に来ていると強く感じる。



橋を渡ったらすぐに古い「岩瀬トンネル」が1号から3号までであるが、天井からは水が落ち、路面は粗く危険なトンネルだ。先ほどの右に傾いた男性ランナーは危険でも右側を進まれていた。青空の下での御母衣ダム湖も良いが、ガスが掛かった幻想的な御母衣ダム湖も良い。ドライブイン「みぼろ湖」反対側の山斜面には白樺林の中



にログハウスがあり、隣には白い花びらの水芭蕉が植えられていたので眺める。既にリタイヤを決めているので、急ぐのはもったいない。少し行けば、ダム側に白樺林があり、「万象寂静水没之碑」「水没記念碑」が並んでいる。御母衣ダム建設によって沈んだ合掌集落の碑だろう。

「乳母谷橋」「小谷橋」を越えたところでいつも写真を撮る。ここは御母衣ダム湖の上に雪を被った白山が見える最初のポイントだ。「大サコ橋」「宮谷橋」を続けて渡ると突然、目の前に「荘川桜」が現れた。

**樹齢450年・庄川桜(151.0km) 5月1日 7時25分**

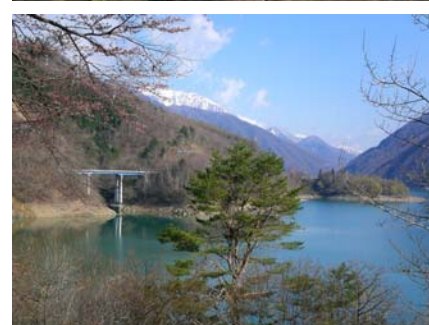
今年の荘川桜は三分咲きくらいだった。ネットで開花情報を毎日確認していたが、昨日も寒かったので一気に開花とまではいかなかったようだ。朝早いが見客も20~30人、見に来られていた。ここ最近通るのはいつも夜ばかりで、やっぱり明るい荘川桜は良い。樹齢450年と聞いてから何年経つのだろうか？。次は樹齢500年と言われるのだろうか？。「照蓮寺桜」「光輪寺桜」、いつも見ても品格というものを感じさせる桜だ。光輪寺桜の幹の分かれている部分には腐食防止のため、コールトールのようなものが塗られていた。今回初めて「故高崎達之助翁と荘川桜」の碑を見た。平成14年10月となっているので、2003年さくら道の時にはあったのだ。その碑には「進歩の名のもとに、古き姿は次第に失われてゆく。だが、人の力で救えるものは、なんとかして残してゆきたい。古



きものは古きがゆえに、尊いのである」と刻まれているが、荘川桜の大移植工事が実現したのも、高崎翁の尽力があつてのことだった。

その先の駐車場では予期しなかったエイドが開設されていた。岐阜の〇川さんの姿もあった。〇川さんも本当に久しぶりだ。温かいマカロニスープとポテトチップスを頂いた。椅子に座らせて貰いながら、御母衣ダム湖を眺められるなんて幸せだ。ここでマッサージをやって貰えたが、リタイヤを決めていたので申し訳なくて断った。歩いて先を急ぐが、ここから御母衣ダムまでが長い。

徐々に白山が大きくなり、全体は見えないが、右側だけが見える。前方に「尾神橋」も見える。「尾神橋」





は御母衣ダム湖畔では一番長い橋で、同時に路肩がないので一番怖い橋でもある。ピンクの桜に白い尾神橋もマッチしている。そんな時、N川さんが後ろから追いついて来た。「このまま金沢まで追っ掛けし、サンダーバードで帰ります。最近野辺山には毎年参加しているが、あまり大会には参加していない。昨年は野辺山でサブ10できた。トライアスロンでは今年、皆生に参加したい」とのことだった。またの再会を約束して別れる。

白川郷まで歩き、路線バスで追っ掛けして金沢まで行こうと思っていたが、13時10分白川郷発に間に合うかがかなり微妙になってきた。というより、休憩を考えるとかなり無理な状況だ。平瀬温泉10時24分のバスに乗ることに軌道修正する。こうなったら、もっとゆっくりできるので写真を撮りまくる。トンネルは走りやすいので、1106mの「福島保木トンネル」は900mほど走れた。右側車道を走り、車がトンネル内に入って来たら、ライトが見えるまでは相当時間が掛かるので、ライトが近づけば歩道に上がるを繰り返す。



空気は肌寒いが、8時半が過ぎ、日差しは強くなっていった。そして、御母衣ダムが近づいて来た。湖面は風がなくて静かで綺麗な。「福島1号トンネル」を通過すると例によってダム湖側に出る。湖面とダムを眺めながら、K田さんから教えて貰った「慰霊碑」に目をやる。ダムの向こう側に見えていた。御母衣ダム建設工事で80人くらいの方が亡くなっているそうで、昔は工事の規模でどれくらいの方が亡くなるか想定し、その分の保証金まで工事費に含まれていたという。「福島3号トンネル」の途中から、正規の道路に入る。このトンネルは路面が無茶苦茶粗く、水も含まれ、一部は真っ暗なので非常に危険なところだ。思ったより長く、神経を使う。そして、やっとトンネルから抜け出せた。



御母衣ダム(158.9km)は8時54分に通過する。ダム側には新しいトンネルが造られようとしているが、冬場は工事でもできないし、予算の関係もあるので、この1年でどこまで進行したのだろうか？。このトンネルは完成したら、古いトンネルも残して上下線が別れるのだろうか？。いろいろ考える。

ここから見下ろせる赤や青の屋根のまばらな家々、山間に咲くピンクの桜と新緑、まさに山里の心和む風景だ。私は御母衣ダムから出た瞬間、目の前に現れるこの牧の集落が大好きだ。大きなS字カーブを

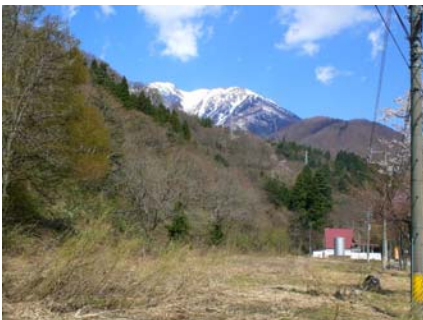






走って下ろうとするが、膝への衝撃が大きくて走れない。真正面にはロックフィル式の「御母衣ダム」が雄大な姿を現す。電気のシルバーの屋根が光っている。下りが終わると桜がやや散り始めた牧の集落だ。

ようやく自販機に有り付けた。〇川さんもここで休まっていた。白山を仰ぎながら、山里の味わい深い雰囲気漂わせる牧。重厚なたたずまいの「御母衣旅館」、山のところどころには桜も見える。左右に首を向けながら、景色を楽しむ。青い空の下での桜並木は、より一層に映える。白山が大きくなってきた。合掌造りの食事処を過ぎると国の重要文化財「遠山家」が真正面に見えて来た。遠山家はカーブ手前100m付近くらいで



見るのが一番だと思う。駐車場の端には残雪の塊が残っている。しっかり遠山家を見ていると何かじっとしていた気分になる。



右側歩道を歩いていると、左側をN原さんが走り歩きされていた。金津の先で見てから、何回か追いつき、追い抜かれを繰り返して来たが、

N原さんの足もかなり重そうだ。左右を見渡すと目に優しい風景が心を和ませてくれる。平瀬温泉の手前には旅館の看板が立っていた。全部で10軒あるようだ。左には白山登山口、見上げると日本三名山のひとつ・白山が大きく迫って来る。日差しは強く、気温は13℃を示していた。



旧道と新道の分かれ目に「大白川の湯・平瀬温泉」のモニュメントがある。ここを右に行けば平瀬温泉街だ。もう1kmも進めば止められるという安堵感でいっぱいになる。こんなことでは駄目なのだが、頑張っって進むのもさく



ら道なら、道楽気分ですつ止めても良いというのもさくら道だと思っている。ここに来ると水が勢い良く流れる音が耳に入ってくる。白山から流れ落ちる雪解け水だろうが、溝から溢れんばかりに流れ、平瀬は水の宝庫だ。昨年、足湯に入った「くろゆり荘」の足湯に手を浸けるとぬるかった。昨年と同じだ。

真っ青な空の元、桜の木を見上げながら進んで行くと、「ちょっと寄っていきなよ」「ウルトラマラソン休み処」と掲げられたエイドが設営されていた。田口建設の前だった。有り難いことだ。毎年、この前を通って来たが、ひとりだどここにエイドがあったなあ〜と思い出しながら、いろいろなことを蘇らせながら、通り過ぎて行ったものだった。今年は寄らせて貰える。コーンスープと飴を頂く。ここでリタイヤ宣言する。一番近い足湯の場所を聞くと、「その先の山水に足湯があるが、湯が抜かれているかもしれない」と言われ、とりあえず行ってみたが、湯は空っぽだった。



平瀬温泉バス停(164. 2km)

5月1日

9時56分

## ■アフターさくら道・白川郷



再び、田口建設エイドに戻り、やって来るランナー達を迎える。知っている人がいたら、リタイヤしたと話し、呼び掛け人・三浦さんには電話が繋がらなかったのだからタラさんに電話し、リタイヤしたと報告する。バスの時間は10時24分だった。3年前の2007年は何と反対側のバス停から高山行きのバスに乗ってしまい、バス代は使ったが、それはそれで楽しいひとりさくら道だったことを思い出し、今回は間違わないようにと自分自身に言い聞かす。佐藤良二さんが植えられたバス停横の桜を見上げ、うしろでわずかに顔を出している白山も見上げる。無念さはなかった。

10時24分ちょうどに高速バスがやって来た。バスには人の姿が見え、朝早くから観光客が多く乗っているなあ～と思っていたら、それはさくら道リタイヤランナーバスに変わっていた。さり～♪さんに巨人軍団のS藤親分、H野さん、I井さん、香峰さんご夫婦をはじめとする仙台のランナー達で知っている顔、顔ばかり。ほぼさくら道リピーターばかりが十数人。バスのドアが開くなり「乗るな、止めるな、前に進め」と手厚い乗車拒否にあった。皆さんは民宿さとうで止められたとのことだった。席に座った瞬間、一気に力が抜けてぐったり気分になる。

白川郷に向かうバスの中から、ヨレヨレになりながらも自力で前へ前へと進んでいるランナーの後ろ姿を見ると、止めて良かったのだろうかどうしても自答自問してしまうが、今の状態が上平辺りで起こっていたら、交通手段がないので、痛み止めを飲みまくっても前に進もうとしていたかもしれないと、仮定ながら思ってしまう。白川郷分岐手前の広場にあった私設エイドには強い日差しを受けながら、何人ものランナーの姿があった。

20分後に白川郷・荻町バスターミナルに着くと凄い観光客の数で、こんな白川郷は過去に見たことがないほどだった。外国人が多く、中国、韓国以外に白人の姿も目立った。山々に囲まれた合掌集落に日本の文化、日本人の古き良き時代の生活を感じたいからか？

この先はランナーを追いながら、13時10分の路線バスで福光に向かい、福光で乗り換えて金沢に向かうつもりだったが、皆さんは金沢行き的高速バスが13時50分にあるというので、追加予約をお願いした。こちらの方は1800円で路線バスよりはるかに安かった。ボクシーさんやとしさんの姿もあったが、何で来られたかはわからなかった。

これから3時間弱あるが、ここからは各自自由行動、10人くらいで軽い食事に。まずは生ビールで乾杯しながら、ランナー談義に花が咲き、もう本当の遠足気分だ。昨年食べられなかった飛弾牛の串焼きとご飯も食べた。観光地だけあって値段は高かったが、こんなさくら道も贅沢だと思えた。庄川に掛かる「であい橋」を渡ると合掌作りの「明善寺」と桜が綺麗だった。そんな時、白川郷のメインストリートでランナーが次々と駆け抜けて行く。名古屋のW部さんやH川さん、マリオパパの姿もあった。コース上にいない自分と終わって気楽な身の現在の自分、複雑な思いで見送る。仙台の方々と喫茶店に入り、さくら道反省会談義する。つい3時間前まで大会に参加していた感じがせず、ひとりさくら道をしていたような気分になるのが不思議だ。



約3時間を潰した後、高速バスに乗ると1時間少して金沢駅に着いた。この1時間は記憶が飛ぶくらいの爆睡



だったが、高速バスはランナーが見えないので残念だ。金沢も肌寒い天気だった。1年前もブラブラしたので何となく思い出し、駅周辺を散策し、ビル近くのラーメン屋に入る。走った後のラーメンは喉通りが良くて、美味しく食べられた。

金沢駅付近で時間を潰し、ひとりで歩いてゴールの「金沢ゆめのゆ」に向かおうと思ったら、50歳代半ばくらいの女性から声を掛けられた。名古屋弁で「あんた、さくら道を走ってなされたの？」という会話から始まり、ご主人が参加され、2003年は莊川桜でリタイヤだったのでリベンジで申し込んだのだが、郡上八幡でリタイヤとなり、荷物のある金沢まで高速を走って、ご主人を送り届けたとのことだった。トップは32時間でゴールされたと聞く。「うちの旦那は根性ないから、とても無理なんや！」と話されていたが、かなり気の強い女性みたいに思えた。後にある走友会の掲示板を見ると郡上八幡リタイヤと書いている人がいたので、その人だったかもしれない。

ここからは足の具合もだいぶ回復していたので、歩いてゴール地点の「金沢ゆめのゆ」に向かうことにした。歩いて行けば、途中で何か食べることもできる。道路右側にはマックスバリューがあるので、つまみを買いに寄る。そして、午後6時過ぎに「金沢ゆめのゆ」に到着。

## ■金沢ゆめのゆにて

そのまま、金沢ゆめのゆ入口のゴール地点にいと2位のN島さんのゴールシーンが見られた。N島さんは入口を間違えられたようだったが、35時間17分でゴール。名前は知っていたが、お顔は初めてだ。かつて99年には初参加ながら重い荷物を背負って平均的なペースで走られ、31時間29分でトップゴールされている。当時50歳、今は61歳になられていたが、とても年齢には思えない若々しさだ。11年前の文集には「無言で迎えてくれた何本もの桜たち。私は忘れません」と書かれていたのが印象的だった。



ダブルさんも間もなくゴールかなと思っているとタラさんから7時を回ると聞いたので、風呂に入ることにした。今回で3回目とあり、勝手も知っている。中に入って行くとたんだいさんやたまごんさんは既に来上っていた。食事処の裏側ステージが荷物置き場となっていたが、まだ現地に着いているランナーは少ないみたいで、ステージには十分余裕があった。みやけんさんがいた。彼は民宿さとうの先でリタイヤし、長良川鉄道を乗り継いで「美濃太田」に行き、そこからは米原経由で金沢に来たそうだ。何かお金の掛かる旅に思えた。



風呂では温めの湯と冷水とを交互に入り、身体の疲れをとるようにした。疲れている時は温めの湯が良い。温泉で疲れを癒した後は夕食だ。前に来た時はもうひとつと思われるメニューが多かったが、いろいろとメニューも増えたようで、鉄火丼と生ビールを頼む。さり〜♪さん、T屋さん、T葉K三さんの4人でテーブルに座って、反省会をするが、反省会ならぬ、ただの飲み会だ。

横で飲まれていた、たんだいさんが近づいてきて、白鳥の向小駄良の公園に植えた莊川桜の実生は元気に育っていたとのことだった。私が見た時はなくなっていて、枯れたとばかり思っていた。残念無念だっただけに、この話は嬉しかった。また、たんだいさんの足は両側ともかなりひどい外反母趾だったのには驚いた。ただ、骨の出っ張りでは私の方がひどいようだ。

再び、荷物のところに行くダブルさんがゴールされていた。N嶋さんのゴールの後、1時間くらい掛かるのではないかと聞いていたが、30分後くらいにはゴールされていたようだ。ネイチャーとのWさくら道ながら、こんなに早くゴールされるとはさすがダブルさんだ。まだ時間は午後8時、ランナーのゴールはまだまだ先だ。ゴロゴロして時

間を過ごすしかない。新聞を見たり、記憶が飛ばないようにメモしたり、持参したノートPCに書き込んだりした。

この間はみやけんさんと話す時間も多かった。みやけんさんは何もすることがないと食べるしかないと言っていたが、全くその通りで私も腹が減ったので塩ラーメンを食べる。食べても食べても満腹感はない。寝る場所は毎回同じ3階の一時休憩所で、10時半頃に場所取りして横になる。ここはトイレも近いし、畳の上でタオルケットを被り、真っ直ぐに足を伸ばして寝られるので快適だ。前で何度も場所を変える男女がいて、とても邪魔だったが、昨夜寝ていないのでそのうちに熟睡できた。ここは0時を回るとヒンヤリするので、トイレに2回くらい起きた。

4時半に目が覚め、制限時間近くになればランナーがまとまってゴールされるので、お出迎えをしようと思う。先ず、朝風呂に入り、身体を温める。温めるといってもいつも最後は水風呂に入るの、あまり温まることはないのだが。5時半頃から半袖、半ズボン姿で外に出るとかなり肌寒い天気、スタッフはみんな冬の姿だった。みんなからは「寒くないの?」と言われたが、「これしか持ってないので・・・」という。確かに少し寒いが辛抱できないほどではない。



しっかりというほどまでは寝ていないが、スタッフの方々は日夜なので大変なはずだ。ゴール写真は菰野RCのK児さんが担当されている。先ず、W邊さんとY田さんがゴール。Y田さんは一緒に連れて来られた犬ともゴール写真を撮られ、普通の大会ではできない光景だった。お馴染みのK園さん、70歳のY崎さんもゴール。Y崎さんはゴール後、肌寒いのにそのままの姿で知人のゴールをずっと待っておられた。余裕のゴールに思え、羨ましかった。知っている人、知らない人、様々だが次々とゴールされる。ゴールの真正面から太陽が上り始め、逆光で写真が真っ黒になるので、ゴールを斜めに換えられた。M田さん、弟の兄さん、72歳のK来さんとM倉さんもゴール。K来さんは元気だったが、M倉さんは身体が傾き、目の焦点が合っていない状態でのゴールだった。マリオパパも



元気にゴール。蛭ヶ野でエイドを出して下さっていた三滝MCのM野さんはかなり疲れた様子でゴール。そして、制限時間48時間のカウントが終わった。今もコース上には何人ものランナーがいて、この金沢ゆめのゆを目指されている。

館内に入り、みやけんさんと朝食。洋食を頼むと和食もおかずは同じで値段は下がっていたが、内容は乏しくなっていたのは明らかだった。その後は11時の懇親会まで時間を潰すしかなかった。懇親会は1階の広間で行われるので、みんな場所を確保したいので早くから付近で待機、人間の熱気でムンムンだった。こがみちゃんは12分オーバーでのゴールだった





模様。やっほ～さんの姿が見えないのが気になっていた。何かトラブルがあったのか？

11時から懇親会が始まり、先ず海宝さんの挨拶。7年間のブランクを乗り越えて開催できたことに対する自分の思いを述べられた。そして、来年開催できるかはわからない。さくら道は1回完結の大会として呼び掛けているからおっしゃられた。

乾杯の音頭はK嵐さんで、私と長い間前後して走った方だった。身体が少し傾き、シューズを擦る走り方で、てっぺんに小銭入れを貼った帽子を被られていたのが印象的だった。そのK嵐さんは整形外科医で、自身の豊



富な経験から、「ウルトラマラソンほど身体を酷使し、身体に悪いスポーツはない。医者としてはお勧めできない。しかし、これほど忍耐力の付くスポーツもない。いろいろな意味で人生を豊かにしてくれる。だから、一旦この世界に入りるとのめり込んで止められなくなる」というようなことを話され、拍手喝采だった。

弁当に箸を突きながら、いろいろな話で盛り上がる。リタイヤでお会いできなかった波多ママの笑顔もあった。恒例のビンゴゲームでは期待していたのだが、いつものことで全くかすりもしなかった。二晩徹夜のこがみちゃん



は食も進まず、まだ夢の中状態だった。遅れてやっほ～さんも席に着かれたが、いろいろあったようだ。遠方の方が多いいことで13時終了予定だったが、できるだけ早く終われるようにと進行は早かった。最後に三浦さんから無事に終わって、ほっとしている。大会が近づくに連れてみさんは緊張感から、夜も眠れない日が続いたと話された。これだけの壮大なワンウェイコースでの大会、個人が準備・運営することの精神的負担の大きさを物語る話だ。来年あるかどうかわからないさくら道ウルトラ遠足だが、多くのランナー達と再会を約束して、会場を去った。

## ■ 帰路

懇親会終了と同時に会場を後にして、ゆめのゆの大型バスに乗り込む。13時前に前にバスは出発し、金沢駅に向かってくれた。土産などを見て、早めにホームに並び、13時55分のサンダーバードに乗る。ダブルさん、こがみちゃん、もりけんさん、やっほ～さん、弟の兄さんと私の6名だった。予定より1時間早く乗れて良かった。車中でやっほ～さんの消息不明話を聞き、ただただ唖然とした。こんなことがあるのかと思うほど眠られていたようだ。居眠りしながらの帰路は16時9分に京都到着。家には17時過ぎに帰る。

## ■ さくら道ウルトラ遠足を終えて

7年振りのさくら道270kmは約100km残す形で終わった。無念とか、残念とかそういう気持ちにはなれず、いつの間にか終わっていたような感じだ。2006年に巨人軍団のそれぞれのさくら道に参加させて貰った時はまだまだ前に行けるだけの体力を持ち合わせていたが、あれから4年の歳月でここまで右肩下がりになっていたことに我ながら驚いている。ここ3年のさくらは自分の足で前に進むことを途中で放棄していたが、それは放棄ではな

く、その時の限界だったのかもしれない。私よりはるかに年齢を重ねられた方々のゴールを見る度に自分はまだまだ甘いと感じるのだが、少し時間が経つとその時に思ったことは完全に忘れてしまっている。

二晩徹夜でゴールされた方々のゴールを見ていると、まだまだやれるのではないかという思いがこみ上げてきたが、現実をダブらせると思いだけでは無理だと思えてくる。何よりも全コースを自分の足で踏みしめて、ゴールしたいとの思いが薄れるとゴールは遠のくのを何度も実感しているからだ。

来年のこともいろいろ考えた。人と一緒に走るということは意識しないつもりでも、人よりも前を進みたいと意識してしまう。歩き出すとどんどん後続に抜かれて行くが、その一時だけ、瞬間だけであっても人に対する競争心が出てしまう。単なる妄想か、負けず嫌いなのかはわからないが、そうになってしまうのだ。それが気持ちの中で限界まで来ると全てを諦めて、もうどうでも良いという風になる。

ひとりで走ると周りを見なくて良いので、競争も負けず嫌いも必要でなく、人を羨むこともない。しかし、さくら道の仲間達とは会いたい。どうすれば良いのか、金沢ゆめのゆに早く着く人のゴールに合わせて、48時間くらい前に岐阜駅スタートで走ってみてはどうか。距離は220kmくらいなので、本来の自分のスタンスである路草旅しながら、のんびりと好き勝手に……。そして、早いランナーに抜かされるのも良いだろう。

## 太平洋と日本海を桜でつなごう

